雑 録 コアニチドリの花序上の無性芽について

長 秀 彦

Hidehiko CHŌ: On the Nature of Asexual Gemma Produced on
the Inflorescence of *Amitostigma kinoshitai*

1962 年 11 月 10 日受付

コアニチドリ（ラン科）には地下の栄養増殖器官として大小 2 個の紡錘状体（いわゆる根）があるが、これ以外に、花序上の花のあるべき位置に各 1 個ずつ数個の無性芽ができる。無性芽はすべての個体に例外なく形成され、コアニチドリの一般的な特徴の一つであると思われる。この無性芽の特異なことは、その栄養貯蔵部（以下では仮に‘根’と称する）が気根の構成を持っていることである。この‘根’は無性芽の始原体の背軸側の内しょうから発達し、明らかに根の 3 原層を備えている。生長した‘根’の中心柱は 5 原型の放射管束からなり、内皮にはカスパー線が見られる。花序に形成される無性芽のなかで、根の性質をもった貯蔵器官を有する例はきわめてまれである。この‘根’は発達したのちに、それぞれの組織に大なり小なりの変型が起こり、原中心柱、原皮層は柔組織化し、根冠は退化し

て痕跡状となる。また、根被は崩壊してセルロース層となり、‘根’の全体を包む。皮層の柔組織は主としてでんぷん粒を蓄積し、その所々に針状結晶の形成や組織の破砕が見られる。この‘根’には上記のような変型が起こるだけで、異常肥大生長はないから、塊根や多肉根からは区別される。この‘根’の構造は、本種の地下の紡錘状体のそれに酷似しており、両者は同一の発達過程をとるものと考えられる。

コアニチドリの無性芽の大きさは 2~2.5 mm で、‘根’の長さは 1.5~2 mm ほどであり、地下の紡錘状体と同様に増殖芽としての能力を有し、翌春、萌芽したのちに、無性芽とはほぼ同大の紡錘状体が分化する。また、直立茎上で無性芽が発達することはないが、無性芽の芽を保護するりん片葉が伸長することが観察された。（栃木県鹿沼市久保町 1609）

植 物 学 研 究 連 絡 委 員 会 報 告

植物学研究連絡委員会（1963 年 1 月 24 日、学術会議）出席者：服部静夫、細川隆英、松浦 一、三輪知雄、森 健志、佐竹義輔、和田文吾、門司正三（主として在京委員）。

（1）生物科学研連委員会将来計画小委員会を動物学研連とともに持つこととなり、その小委員会の委員をつぎの 5 名に委嘱することを決定した。

林 孝三、門司正三、佐竹義輔、佐藤七郎、高宮篤（なお動物研連側委員は、朝比奈正二郎、団 勝磨、藤井 隆、北沢右三、元村 勲。小委員会委員長 林 孝三、幹事 北沢右三）。

（2）次期の植物学研究連絡委員を、かねて各委員から 5 名ずつ推薦をうけていたものをもととして、地区、専門などを考慮して、つぎの 13 名に依

嘱することを決定した。

松浦 一、長尾昌之、林 孝三、前川文夫、門司正三、小野記彦、佐竹義輔、八巻敏雄、森 健志、芦田譲治、神谷宣郎、服部静夫、細川隆英（その後、第 6 部より九大農教授学術会議 6 部会員 片山 佃、東大農教授佐藤大七郎の両氏が植研連委員に推薦され、委員長 服部静夫、幹事 林 孝三に決定）。

（3）国際生物学計画 IBP (International Biological Programme) については、その後の情報をまっているが、将来必要がおれば、植研連からも代表を計画の会議に参加させることがのぞましい。

（4）日米科学委員会のその後の情報について佐竹義輔氏からかんたんな説明があった。（門司正三）